超舞台

『ラストジェネレーション　～僕らが誕まれてきた理由～』

作・演出　ＨＡＲＵＡＴＡサーカス

登場人物

バグ・・・革命軍ラストジェネレーションの新米少年戦士
メモリー・・・歌の上手な記憶のない少女
ハード・・・ラストジェネレーションの総指揮官
アイコン・・・ラストジェネレーションの女性戦士
リモート・・・ラストジェネレーションの若い兵士
カーソル・・・人間の脳を移植したロボット型生命体
ピクセル・・・アイコンの愛犬だった犬のデータを移植したロボ犬
ドット・・・ピクセルの親友　特攻隊所属のロボット犬
コピペ・・・カーソルが作ったロボット猫
デリート・・・データベースを抜け出し逃走中のアバター
メタ・・・人類のデータ化を推進するワールド国ＣＥＯ
ウイルス・・・メタの側近　ワールド軍の兵士
クラッシュ・・・ワールド軍の女性兵士　ウイルスの恋人
マザー・・・データ化されたメモリーの母親
シリコン博士・・・データ化実験の博士
プリンター・・・シリコン博士の助手
クラウド・・・データ化を待つ囚われの兄妹の兄
ウェブ・・・データ化を待つ囚われの兄妹の妹
アニマルロボット（ダンサー）
ロボットソルジャー（ダンサー）

ワールド国。メタシティ。
大観衆の前で、演説をするワールド国ＣＥＯ、メタ。
メタ「いま我々はひとつになった。国境も偏見も差別も、老いも病も生命さえも超越した世界へ、ついにたどり着いたのだ。痛みも苦しみも、不安や悩みさえももはや存在しないのだ。もう恐れることはない。さぁアクセスしよう、偉大なワールド国に！自らのすべてをアップロードして共に称えよう、永遠の平和を！」
大観衆「メタ！メタ！メタ！メタ！メタ！メタ！メタ！…………」

歌とダンス　ロボットソルジャー

マザー「いい、メモリー？何があっても忘れないでね。あなたは私の大切な娘。どんなに離れても、どんなにつらいことが起きても、ママとあなたは繋がってる。この絆は誰にも消せない。だから忘れないで、ママがどれほどあなたを愛しているかを」
メモリー「私も愛してる…絶対忘れないわ…何があっても」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

瓦礫の町。
バグ「ひどいな…この町もこんな瓦礫の山になってるなんて」
ピクセル「あ、そこどいて」
バグ「わ、なんだなんだ！？…犬？」
ピクセル「やった、あったぞ！原子力電池だ、それもＢ３４（ビースリーフォー）のレアメタルモデルだ！久しぶりのごちそうだぁ」
バグ「おい、電池なんか食べちゃダメだよ！お腹壊すよ、ほらダメだったら」
ピクセル「やめろよ、返せ！おいらが先に見つけたんだぞ！この泥棒！悪人！おたんこなす！……うぇーん（泣）」
バグ「おいおい泣くなよ、仕方ないな、返すけど本当にこんなもの食べるの？」
ピクセル「よこせ！（パクッ…モグモグ）ん～、美味しい」
バグ「本当に食べちゃった…大丈夫かい？」
ピクセル「(モグモグ）大丈夫に決まってるだろ？おいらはロボット犬だぜ。だいたい、普通の犬なんてもういやしないし、しゃべったりもしないだろ」
バグ「あ、そうか…そりゃそうだね、ははは…急に出てくるからビックリしちゃって」

ピクセル「君こそこんなところで何してるの？見たところ人間みたいだけど」
バグ「僕はバグ。メタシティに行く途中なんだ」
ピクセル「メタシティ？何しに？」
バグ「それは」

アイコンがピクセルを探しに来る。

アイコン「ピクセル？どこなの？勝手にいなくなったりしないで。そろそろ戻るわよ」
ピクセル「いけね…アイコン、こっちだよ！」
アイコン「まったく、離れないでっていつも言ってるでしょ？ところで何か見つかった？…まぁ、こんにちは」
バグ「こんにちは」
アイコン「あなた誰？」
バグ「バグって言います。今ちょうどこの子と鉢合わせして。あなたの犬ですか？」
アイコン「ええ。死んだ愛犬のＤＮＡデータを元にして作ったの。可愛いでしょ」
ピクセル「ハッ、ハッ、ハッ」
バグ「可愛い…ですね、あははは」
アクセル「いつメタ達の攻撃が始まるか分からないわよ。気をつけなさい」
バグ「わかりました」

爆撃が始まる。

アイコン「いけない、感知されたわ。ピクセル、行くわよ」
ピクセル「了解だわん」
アイコン「バグ、ついてきて！」
バグ「どこへ？」
アイコン「話はあと。さぁ！」
バグ「はい！」
逃げる３人。続く爆撃の音。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

地下の革命軍【ラストジェネレーション】司令部。

バグ「へー…地下にこんなすごい基地があるなんて知らなかった」
ピクセル「驚いた？おいらはここで誕まれたのさ。だから故郷だね」
バグ「故郷か…」
ピクセル「バグにだってあるだろ？故郷」
バグ「少し前まではあったけど…ワールド国に反対してる村だったから、何もかも破壊されたよ…ミサイルや爆弾で」
ピクセル「そうだったのか…ひどいね」
バグ「うん…」

ドットとコピペが来る。

ドット「ピクセルどこ行ってたんだたちのよ。だれ？こいつ」
コピペ「どこからきたの？名前は？年いくつ？」
ピクセル「落ち着けよ、コピペ」
コピペ「いけない、えへ」

アイコンとハード、リモートが来る。

ハード「ドット、訓練の時間じゃないのか？」
ドット「あ、ハード司令官！今すぐ行きます、じゃあな」
アイコン「コピペ、修理の予約してたんじゃないの？」
コピペ「そうだった！」
ピクセル「どうかしたの？」
コピペ「最近、ひげアンテナの調子が悪くて。嫌んなっちゃう」
リモート「メタたちの電磁波攻撃のせいでしょうか？」
ハード「おそらくな」
コピペ「またあとでね、えーと」
アイコン「バグよ」
コピペ「バグね（ウィンク）」
アイコン「だけど無事でよかった。あのまま一人でうろついてたら今頃…」
ハード「この辺りは反体制側の拠点だった町だから、監視ドローンがうじゃうじゃいるんだ。子供でも犬でも見つかったら容赦なく攻撃してくるぞ。死にたくなかったらもっと用心することだ。ピクセル、お前もだ」

ピクセル「くぅーん…」
ハード「それで、どうしてこの街に？」
バグ「実は父さんが半年前、メタシティに行くと言って村を出たまま帰って来ません」
ハード「父親を探してるのか」
バグ「はい」
アイコン「何しに行ったの？」
バグ「わかりません」
ハード「母親は？」
バグ「母さんは…残った村の人たちと一緒に、攻撃の少ない北の辺境の地に移動していきました」
ハード「村には何人ぐらいいたんだ？」
バグ「５００人くらいです」
リモート「けっこう大きな村ですね」
バグ「みんなで畑をやっていました。麦やトウモロコシ、ジャガイモなんかを作っていたんです」
アイコン「お父さんはどんな人なの？」
バグ「背が高くて体も頑丈で強くて、でもすごく優しくて…曲がったことが大嫌いで、女の人や自分より小さな子は守ってやらなきゃダメだっていつも言ってました」
アイコン「お父さんが大好きなのね」
バグ「はい！それと…奴らの好きにはさせない、このままじゃ世界は終わりだって言ってました。その後です、父さんが出て行ったのは」
ハード「お父さんの名前は？」
バグ「リセットです」
アイコン「まぁ…」
バグ「父さんを知ってるんですか？」
ハード「もちろんだ。リセット軍曹は…立派な戦士だった」
バグ「リセット軍曹？どうして父さんを知ってるんですか？あなたたちは誰なんですか？」
ハード「俺はハード、総指揮官だ。彼女はアイコン、女性戦士のリーダーだ。それからリモート。そしてここは、地下２００メルトにある革命軍ラストジェネレーションの司令部だ」
バグ「ラストジェネレーション？…思い出した、僕が寝た後に父さんが母さんと話してた…ワールド国を倒すために作られた革命軍の話…僕はなんだか怖くて寝たふりをしてたけど…母さんが泣いてた、行くのはやめてくれって…じゃあ、

父さんはここに？」
ハード「ああ、そうだ…彼は我が軍の軍曹だ」
バグ「じゃあ父さんはここいるの！？会わせて！お願いです、父さんに会わせてください！」
アイコン「バグ…お父さんはここにはいないわ」
バグ「なぜ？どうしていないの？」
ハード「バグ、よく聞いてくれ…俺はリセット軍曹にある作戦を託した」
バグ「ある作戦？なんですか、それは」
ハード「…電磁波爆弾を背負って敵の中枢に侵入し…爆発させること」
バグ「爆発させる？…爆弾を仕掛けたあと…父さんは逃げたんですよね？」
ハード「いや…」
リモート「爆弾は起爆装置を解除されないように、目的のポイントに到達次第、爆発させる作戦だったんだ」
バグ「それじゃ…父さんは？」
ハード「メインターゲットまではたどり着けなかったが、その手前の重要なポイントを破壊してくれた。かなりのダメージを負わせることに成功し、その後の我々の作戦はかなり前進することが出来た」
バグ「…あなたが行かせたんですか？」
アイコン「バグ…」
バグ「あなたが行かせたんですね？」
リモート「現場での直接の指揮は私が」
ハード「リモート…すまない、バグ」
バグ「あなたたちが父さんを殺したんだ…あなたたちが僕の父さんを…この野郎！（つかみかかる）」
アイコン「落ち着いて、バグ！リセット軍曹は志願したのよ。世界のため、いいえ、あなたたち家族のために」
バグ「家族のため？」
アイコン「そうよ…家族のために自分の命を懸けて戦った。立派な人だわ」
バグ「そんな…そんな…」
ハード「俺たちは何としてもメタの計画を止めなきゃならない。どんな犠牲を払おうとも…」
アイコン「まさかあなたに…リセット軍曹の息子さんに会えるなんて…ちょっと待っててね（形見を取りに行く）」
バグ「……」
アイコン「はい」
バグ「…なんですか？これ」

アイコン「お父さんの形見よ。（ハーモニカ）渡せて良かった」
バグ「…父さん…父さん！（ハーモニカを抱きしめて泣く）」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハーモニカを吹くバグ。
するときれいな歌声が聞こえてくる。

歌「アニーローリー」

バグ「きれいな声だね」
メモリー「あなたの笛も素敵だったわ」
バグ「ハーモニカっていうんだよ。父さんの形見なんだ」
メモリー「形見？死んじゃったの？」
バグ「うん…以前はみんな一緒に暮らしてたのに…一緒にご飯食べて、一緒に働いて、一緒に寝て…どうして世界はこんなにひどい仕打ちをするんだろう」
メモリー「いいわね。思い出があって」
バグ「何がいいって言うんだ！？こんなに苦しいのに、こんなに悲しいのに…いっそ思い出なんか消えちゃえばいいんだ！」
メモリー「苦しくても悲しくても、何もない方がいいわけがないわ」
バグ「え？」
メモリー「私、何も覚えてないの。家族も友達も、生まれた町もどんな暮らしだったのかも」
バグ「なぜ？どうして覚えていないの？」
メモリー「分からない。私が憶えてるのは歌だけ。どうしてか歌だけはたくさん知ってるの。世界中の歌をたくさん」
バグ「世界中の歌を…」
メモリー「そうよ、世界中の歌」
カーソル「世界には昔、たくさんの国がありましたからね」

サイボーグのカーソルがやってくる。

バグ「君は？」
カーソル「割り込んですみません。私はカーソルと言います」
バグ「ロボット？」
カーソル「そうですね、体はロボットですが脳は人間です。つまりサイバネティ

ック・オーガニズム、いわゆるサイボーグというやつです」
バグ「サイボーグ…じゃあ以前は生きてたの！？あ、ごめんなさい、今も生きてるのか…」
カーソル「気にしないでください。はっきり言って死んでます」
バグ「死んでるの！？」
カーソル「だってそうでしょう、私の脳は体内の原子力蓄電池から送られてくる電力によって稼働してるにすぎません。バッテリーが切れたら一巻の終わり、お・だ・ぶ・つなんですから（笑）」
バグ「……」
カーソル「私はワールド国による人類データ化計画の犠牲者なんですよ」
バグ「犠牲者？」
カーソル「ご存じのように、世界は度重なる核戦争の末、地球を破壊しつくしました。残された生存可能エリアは半分以下になってしまい、人類の未来は絶望的でした。しかし救世主のごとく突如現れたのが、ワールド国現ＣＥＯ、メタ」
バグ「メタは何をしようとしているの？」
カーソル「やつは、残された全人類をデータ化しようとしているんです。データ化しすべてを管理し、思いのままに世界を作り変えようとしているのです」
バグ「人類のデータ化だって？そんなことが出来るの？」
カーソル「私をよく見て下さい。あとは脳を完全にデータ化し、集積回路に乗せ換えればいっちょ上がりって寸法です」
バグ「じゃあ君はどうして？」
カーソル「逃げたんです。インストールの途中で」
バグ「逃げた？」
カーソル「正直言いますと、実は私、サイボーグになるために自ら望んでメタシティに行ったんです」
バグ「なぜそんなことを」
カーソル「永遠の命と、永遠の思考を求めて…とでも言いましょうか…だが今でははっきり自分が間違っていたと分かります。眠らずに考え事を続けられても、半永久的に生きることが出来たとしても…」
バグ「しても？」
カーソル「もはや誰も私を愛してくれないのです！（大泣）」
バグ「涙、出てないけど…」
カーソル「サイボーグですからねぇ…彼女がなぜ記憶を失ったのかは分かりませんが、きっと何かトラブルが起きて強いショックを受けたんでしょう…それとも」
バグ「それとも？」

カーソル「何者かが強制的に消去したか」
バグ「かわいそうに」
メモリー「(歌い出す)」
カーソル「だけど不思議ですね。彼女は歌だけは忘れなかった。そのことだけでも世界にとっては祝福すべきことでしょう。う~ん、いつ聞いても素晴らしいですねぇ、彼女の歌声は」
バグ「うん、本当に」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタシティ。

メタ「暗号キーはまだ発見できないのか？」
ウイルス「申し訳ありません、監視ドローンを１０００機に増強し目下捜索中です」
メタ「急いで回収しろ。マザーの状況はどうだ？」
ウイルス「データのインポートは完了していますが…どうしても最後のロックが解除できず難航しています。やはり暗号キーを入手しないことには」
メタ「マザーと成り得る人間は全人類の中で彼女たった一人。彼女の記憶は１００世代を超える記憶。太古からの記憶を持つ人間は神に等しい。その記憶こそがワールドビッグデータとなり、世界を支配するのだ」
ウイルス「はい、メタ様」
メタ「だが、そのビッグデータを実際に動かすためには暗号キーが必要なのだ。暗号キーとはすなわち、マザーの子供のＤＮＡデータ。二つがそろってこそ真のビッグデータ、マザーオブワールドは完成する」
ウイルス「承知しております、メタ様」
メタ「かつて人類は機械を人間化しようとした。ＡＩと呼ばれた旧式のシステムだ。そしてそいつに世界の安全を任せ、失敗した。なぜ失敗したと思う?簡単なことだ、人間は時として予想不可能な行動をするからだ。人間の真似をしたＡＩによって次々と核のボタンは押され、世界は秩序を失った」
ウイルス「愚かなことです」
メタ「そこで私は全く逆の方法で世界を統一することにした。人間の方が機械になればいいのだ。マザーオブワールドを完成させれば世界は永遠の秩序を手に入れる。それなのに愚かで下等な一部の人間が私の邪魔をする…だが私は必ずこの手で世界を作り変えてみせる」
ウイルス・クラッシュ「ワールド国、万歳！」
メタ「データ化計画の進行状況を報告しろ」
クラッシュ「はい。現在、ワールド国全人口の４０パーセントがデータ化を完了

しています。生存放棄はその内約８０パーセントに達しております」
メタ「おそい。私の計画完了には程遠いスピードだ」
クラッシュ「申し訳ありません。反対派の動きがこのところ活発化し、残った多くの人間が地下に潜ってしまい、計画遂行がやや遅れています。しかも革命軍のテロ攻撃は一段と先鋭化し」
メタ「だったらこちらも命がけで迎え撃たないか。それとも自分の命は惜しいか？」
ウイルス「いえ、そんなことは…」
メタ「成果をあげれば残れるんだぞ。血の通った、一握りの人類として」
ウイルス「はい、肝に銘じております、メタ様」
メタ「地球にはもう、選ばれた人間のみいればいいのだ。役に立たない人間は管理し飼いならし、残りの歯向かうバグどもは…全消去だ」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ラストジェネレーション司令室。

リモート「なんだと？ラストジェネレーションに入隊したいだって？」
バグ「はい！」
アイコン「どうしたの、バグ…どうして急にそんなこと」
バグ「父さんの遺志を継ぎたいんです」
リモート「リセット軍曹の…本気なのか？」
バグ「本気です！父さんが守ろうとしたものを僕も守りたい。母さんや村の人たち、自分自身も…それから…メモリーの歌も…」
アイコン「メモリーの歌？」
バグ「はい…昨日、メモリーの歌を聞いていて良くわかったんだ」
リモート「なにをだ？」
バグ「人間にしかできないことを守らなくちゃいけないって」
アイコン「人間にしかできないこと？」
バグ「うん…どんなに便利になっても、どれだけ世の中がデータ化されても、昨日のメモリーの歌はコンピューターには歌えない。優しくて懐かしくて、ちょっと寂しくて、でもすごくあったかい…そんなのどうやってデータにするっていうんですか？メタは歌なんか必要ないっていうのかもしれないけど、そんなことない！絶対にそんなことないんだ！だって僕たちは生きるためだけに誕まれてきたんじゃない…多分もっと何か…きっと…意味が…」
アイコン「誕まれてきた理由？」
バグ「そうです！…僕はそれを見つけたい。その為に、ラストジェネレーション

に入って世界のために戦いたいんだ！父さんがそうしたように…」

ハードが来る。

ハード「わかった、バグ。お前の入隊を認めよう」
バグ「本当ですか！？ありがとう、ハード指揮官！」
ハード「ただし」
バグ「ただし…なんですか？」
ハード「決して死ぬな。必ず生きてこの世界を変えよう。いいな？」
バグ「わかりました！生きて、戦って、世界を変えます！」
アイコン「お父さんにそっくり」
バグ「え？」
アイコン「いいえ、何でもないわ。やりましょう、一緒に」
バグ「はい！」

カーソルとピクセルたちが慌てた様子で現れる。

ピクセル「大変だわん！」
アイコン「どうしたの？ピクセル、そんなにあわてて」
カーソル「それが…メモリーがどこにも見当たらないんです！」
ハード「なんだって！？」
リモート「メモリーの発信機の信号は？」
カーソル「感知できません」
アイコン「最後にメモリーを見たのは？」
カーソル「昨日の夜は一緒でした…バグも」
バグ「はい、一緒でした。でもメモリーに発信機って…なんのために？」
ハード「メモリーは我々にとって切り札なんだ。決して奴らに渡すわけにはいかない」
バグ「切り札？」
リモート「モニター！」
アイコン「1時間前の監視カメラの映像ね…メモリーが地上にいる！」
ハード「どういうことだ…」
ドット「何か聞こえますね…」
カーソル「音声を増幅してみましょう」

コピペ「なになに？」
ドット「これ…」
ピクセル「…歌だ」
アイコン「…まさか！」
ハード「やられた！マザーの歌声でメモリーをおびき寄せたんだ！」
バグ「マザー！？マザーって何のこと？」
カーソル「マザーっていうのは…ワールド国の心臓部、君のお父さんが破壊しようとして近づけなかったマザーコンピューターです」
ハード「すぐに出動だ！なんとしてもメモリーを救い出すぞ！バグ、お前はここにいろ」
バグ「嫌です！さっき僕を入隊させるって言ったじゃないですか！」
リモート「実戦は遊びじゃないんだ。お前にはまだ無理だ」
バグ「そんな…僕だってメモリーを助けたい！お願いです！一緒に行かせてください！」
ハード「駄目だ」
バグ「お願いします！」
ハード「駄目だったら駄目だ！何度も言わせるな！…今のお前じゃ、足手まといなんだよ。リセット軍曹だって、きっと同じ判断をするはずだ」
バグ「……」
ハード「分かったな？…よし、行くぞ！」
リモート「はい！ドット行くぞ！」
ドット「はい！」
アイコン「バグ…」
ハード「アイコン、急げ！」
アイコン「了解！（出動する）」
バグ「…ちくしょう！」

緊急司令が鳴り響く地下基地。
出撃する革命軍ラストジェネレーション。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

地上。

ピクセル「出てきていいよ」
バグ「ここはどこ？」

カーソル「基地から１０ｋｍ地点、我々の地下道の東の端っこです」
バグ「ドローンがいないね」
カーソル「あれは敵側がメモリーの発見を一番の目的とした偵察機ですからね。メモリーを確保した今は、帰還したのでしょう」
ピクセル「だけどバグ…本当に行くのかい？」
バグ「行く。メモリーを助けたい…それに」
コピペ「それに何？」
バグ「見てみたいんだ…メタシティを、この目で」
ピクセル「どうして？」
バグ「行けば分かる気がするんだ…父さんが何のために死んだのか…そして世界の未来も」
カーソル「だけど一人で行くなんて無茶ですよ…」
ピクセル「え？お前来ないの？」
カーソル「は？…まさかピクセル、ついていくつもり？」
ピクセル「当り前じゃん！なんて薄情な奴だ、血も涙もないのか？」
カーソル「あいにく持ち合わせてない」
ピクセル「おまえそれでも、元人間！？」
カーソル「ひどい！ピクセル、仲間とはいえ今の言い方はあんまりだ！謝罪しなさい、今すぐ謝罪しなさい！」
ピクセル「やだよー、ホントの事だもん！」
カーソル「だいたい君だってロボット犬でしょ！？血も涙もないのは一緒でしょうが！？」
ピクセル「ざんねーん！おいらはこう見えてちゃんと泣けるんだもーん」
カーソル「うそ…どうして？」
ピクセル「うそじゃないよ。ほら、よく見てごらん。おいらの鼻、本物の犬の鼻だよ」
カーソル「なになに！？ふーむ…ピッ、ピッ…解析中…あー、本当だ！本物の生きた犬の組織だ！知らなかった…」
ピクセル「えへん！おいらが死んでロボットになるとき、アイコンが鼻だけ移植してくれたのさ。だから悲しくなったり、嬉しいときは鼻の奥にあるセンサーがツーンとしてきて、涙がこぼれるようになってるってわけ。どう？うらやましいだろー」
カーソル「めちゃくちゃうらやましい…ああ、もう一度思いっきり涙を流して泣いてみたい！（大泣き）」
バグ「やっぱり涙、出てないけど…」
カーソル「ええ、サイボーグですから」

ピクセル「で？カーソルは友達を見捨てるってわけね。いいよいいよ、さすが冷たい冷たいサイボーグだなぁ、感心しちゃう」
バグ「友達？ありがとう、ピクセル。心強いよ」
ピクセル「当然だろ？と・も・だ・ちなんだから」
カーソル「くー…わかりましたよ！行きます、行けばいいんでしょ！？」
ピクセル「投げやりな言い方」
バグ「カーソル、ありがとう！本当はとても怖いんだ…だけど二人が一緒なら、僕頑張れそうだよ！」
カーソル「了解しました。メタシティの場所を知ってるのは私だけですしね。それに」
バグ「それに、なんだい？」
カーソル「私もリセット軍曹には大変お世話になりましたから。恩人のご子息を見捨てるわけにはいきませんからね」
バグ「カーソルが、父さんに？」
カーソル「ええ。私がメタシティから逃げ出し、途中で動けなくなっていたのを発見して基地に運んでくれたのはリセット軍曹なんです。あの方はサイボーグの私を人間同様に扱ってくれました…本当に心の美しい方でした」
バグ「そうだったんだね…だけど命令に背いて僕と一緒にいたら、後できっとひどく怒られちゃうね」
カーソル「大丈夫ですよ」
バグ「なぜ？」
カーソル「ハード指揮官はあなたが心配なんです。盟友の息子さんを危険な目に合わせたくない。だから出動を認めなかった。だけど結局あなたはメタシティに行っちゃうわけでしょ？それを知りながらお供しなかったら、それこそ私はハード指揮官からどんな叱責を受けるか」
ピクセル「実はね、さっきアイコンから通信が来てね、頼まれたんだ。もし、バグが基地から出ていくようなことがあったらついて行けって。リセット軍曹の子よ、それこそ何をしでかすか予想がつかないからって（笑）」
コピペ「あたしも行くわ」
カーソル「え？駄目だよコピペ！ここまでって約束でしょ！？」
コピペ「やめて！まったく過保護なのよ、カーソルは」
カーソル「当たり前でしょう！君は私が作った癒しを目的にした猫型ロボットで」
コピペ「あたし、そんないい子ちゃんじゃないもーん！みんな、出てきて！」
瓦礫の中からアニマルロボットが出てくる。

コピペ「時々内緒で外に出てるの。その時出会ったのよ、いらなくなったり故障して捨てられちゃったアニマルロボットたちに！」

歌とダンス　アニマルロボット

カーソル「それでは行きましょうか。メタシティへ」
アニマルロボット「行ってらっしゃーい！」
バグ「行ってきまーす！」

アニマルロボットたちに見送られ出発するバグたちに、ついてくる壊れたロボット。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタシティのデータ化実験研究室。
機械につながれ拘束されたクラウドとウェブの姉弟。

シリコン「プリンター、転送装置の調整はどうだ？」
プリンター「問題ありません、シリコン博士」
シリコン「そうか。では、転送を開始しよう。今日はパラメーターを上げて転送速度を２倍にしてみよう」
プリンター「２倍ですか…危険ではないでしょうか？転送後のデータに転送不良が起きたらまたこの間のように…」
シリコン「やるんだ。メタ様は急いでおられる。人格崩壊したデータは消去すればいい」
プリンター「ですが…」
ウェブ「やめろ！」
シリコン「安心しなさい。痛みはない。気が付いた時にはすでに君たちの肉体はない。角膜以外はね」
クラウド「お願い、助けて！弟だけでも…どうか」
プリンター「大丈夫だよ…」
クラウド「なにが大丈夫だと言うの！？データ化されるなんて嫌！」
ウェブ「待ってろ、このクソ野郎！こんなもん簡単にぶっ壊して、今すぐお前のその面俺の１００万パンチで……クソッ！」
シリコン「あきらめなさい。データ化されれば不必要な労働や悩みからも解放されるのだ。いずれ君たちも感謝するだろう」
プリンター「ですがやはり…」
シリコン「なんだね？」
プリンター「望まないものを無理にデータ化することは間違いではないのでしょうか？」

メタが来る。

メタ「そんなことはお前が考える必要はない」

シリコン「メタ様」

メタ「君たち科学者は私の言う通り、実験を続けてくれればいい」

シリコン「はい、承知しております」

視覚と聴覚もふさがれ転送準備をされるクラウドとウェブ。

ウイルスとクラッシュがメモリーを連れてくる。

メタ「やっと取り戻したか。ずいぶん手間がかかったが、あとはお前のＤＮＡデータをマザーに入力すれば全て完成だ。ロックはすべて解除され、マザーオブワールドは実存する神として世界を統治する。どうだ、うれしいだろ？」

メモリー「何の話か分からないわ。マザーって何のこと？それより返して。私は何も知らないし、何の役にも立たない」

メタ「そうでもないぞ。これからお前は自分がすごい存在なんだということを知るようになる。これを見ろ」

メモリー「…なに？…これ…」

メタ「マザーだ」

メモリー「マザー？」

メタ「ここには人類が誕生してからの記憶がすべて存在している。二足歩行をはじめ道具を使い火をおこし、やがて武器を手にし、新天地を求めた命懸けの旅、数えきれない戦を繰り返し、遂には世界中の殺し合いによって人類の数は３分の１以下になった。どうだ？人は愚かだろう？」

メモリー「わからないわ…たぶんあなたの言う通りなんでしょうけど、私には関係ない。ここにすべての記憶があったとしても、私自身の記憶は私にはないから、無意味だわ」

メタ「そう焦るな。意味はある。なぜなら、お前の記憶もこの中にあるからだ」

メモリー「なんですって？私の記憶があるですって？いったいどういう事？」

メタ「自分で確かめたらいい。マザーはスリープ状態だ。このボタンを押してみなさい。そうすればお前は私の言った意味を知るだろう。さあ、押しなさい」

メモリー「…このボタンを押したら何が起こるっていうの？…怖い…でも…（ボタンを押す）」

マザーが起動する。

マザー「ワールド歴Ｚ１２アルファ、１３ムーン４６、ポイントタイム２０９４１、再起動します」

歌とダンス　ロボットソルジャー

警報「メタシティ領域に敵の侵入を確認。総員は直ちに迎撃態勢に入れ。繰り返す、メタシティ領域に敵の侵入を確認」

メタ「小賢しいハエどもが。クラッシュ、メモリーを転送装置につなげ。シリコン、いったん中止だ。念のため防衛システムを点検しておけ。すぐ戻る。行くぞ」
ウイルス「は」
クラッシュ「武器を」
プリンター「え？」
クラッシュ「何かあったら引き金を引きなさい。いい？」
プリンター「いや、あの…私は！」

出ていくメタたち。

シリコン「ここを頼んだぞ。点検に行ってくる」

出ていくシリコン。一人にされ困惑するプリンター。
歌を歌い出すメモリー。

プリンター「おい…おい、歌を止めろ」
メモリー「(歌い続ける)」
プリンター「やめてくれ…頼む」
メモリー「(歌を止める) なぜ？」
プリンター「なぜって…わかってるのか？君は囚われてるんだぞ？」
メモリー「平気よ」
プリンター「なにが平気だっていうんだ」
メモリー「必ず助けに来てくれる」
プリンター「誰が来るっていうんだ」
メモリー「みんなよ」
プリンター「みんな？」

暴れ出すウェブ。

プリンター「静かにしろ！こら、暴れるんじゃない！」
ウェブ「うおー！……（体を痙攣させて動かなくなる）」
プリンター「おい…おい！嘘だろ…やめてくれよ…死んじゃったのか？どうしよう…おい、おい！」

呼びかけながらウェブの装備を外すプリンター。
死んでしまったように動かないウェブ。

ウェブ「この野郎！」
プリンター「うわぁ！生き返った！」
ウェブ「死んだふりしただけさ！だまされやがって（笑）」

プリンターをやっつけ銃を奪うウェブ。

ウェブ「姉ちゃんのも外せ。早くしろ！」
プリンター「わかった…（クラウドを開放する）」
クラウド「ウェブ！」
ウェブ「姉ちゃん！」
クラウド「早く逃げましょう！」
ウェブ「あぁ！（メモリーを見て）あんたもデータ化されそうなのか？」
メモリー「わからないわ」
ウェブ「よし、この人のも外せ。言うとおりにしろ！」
プリンター「わかったわかった…（メモリーを開放する）」
メモリー「ありがとう、あなたきっといい人ね」
ウェブ「俺たちをデータ化しようとしてたんだぞ！こいつのどこがいい人だなんて」
クラウド「だけどウェブ、この人は望まない人のデータ化は間違いだって」
プリンター「すまなかった！…私はデータ化は良いものだと思って研究に加わってきたけれど、やっぱりおかしい。間違ってる！…だけど勇気がなくてここまで従ってきてしまったんだ…」
メモリー「だったら一緒に逃げましょう」
プリンター「いいのか？」
ウェブ「仕方ねえな…行くぞ」

クラッシュが来る。

クラッシュ「そこまでよ、坊やたち」
ウェブ「お前どうして…これでもくらえ！（銃を撃つが反応がない）…あれ？こいつ！…くそ、そりゃ！おりゃ…なんだよ、こんな時に」
クラッシュ「（笑）もともと壊れてる銃よ」
プリンター「なんだって？」

シリコンも戻ってくる。

シリコン「プリンター、そんな弱い気持ちでは世界は変えられないぞ」
プリンター「シリコン博士…」
クラウド「だましたのね」
クラッシュ「裏切者の監視は重要よ。いつの世も組織というのは内部から腐り始める。見つけ次第排除するのが鉄則」
シリコン「残念だよ、プリンター」
クラッシュ「さぁ、こっちに来て。マザーと一緒にお眠りなさい」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタシティへの道。

コピペ「疲れたわぁ…一休みしましょう」
ピクセル「猫型ロボットくせにどうして疲れるんだ？」
カーソル「癒しの効果のために一定時間が経過すると眠たくなるコマンドを追加したのがいけませんでした」
バグ「あははは、猫は寝てることが多いからね。それじゃ少し休憩しよう。僕ものどが渇いたよ。君は大丈夫かい？」

バグ「いけね、お腹すいて間違えちゃった！」
バグ「それじゃそろそろ行こうか」
ピクセル「ＯＫ，レッツ（ゴー）」
デリート「止まれ！（電磁波銃をかまえている）」
カーソル「…どちら様ですか？」
デリート「誰でもいいだろ。そこのロボット犬、カバンをよこせ」
ピクセル「やだよ、ご飯が入ってるんだから」
デリート「いいから寄こせ！全員この電磁波銃でぶち殺すぞ！」
カーソル「弱りましたね…」
バグ「君は誰？どこから来たんだい？話せばわかるよ、まずはその銃を」
デリート「近づくな！（地面に打つ）」
コピペ「ニャ！自慢のしっぽが焦げたらどうするのよ！」
デリート「うるさい！…お前、人間か？」
バグ「そうだよ」
デリート「なぜ人間がうろうろしてる？ここは戦闘区域だぞ」
バグ「メタシティへ行くんだ」
デリート「メタシティ？馬鹿かお前？あそこはお前みたいな人間が行くところじゃない」
バグ「僕の何を知ってるって言うのさ。今会ったばかりだろう」
デリート「あはははは、俺のスペックは高性能ＣＰＵにメタＯＳ３．０だ。お前の声、体温、眼球の動き、細胞年齢を即座に検知して、全てお見通しさ。お前、反体制の人間だな？」
バグ「反体制？じゃあ君はワールド国側なの？」
デリート「もともとはな。だが今は違う。俺はワールド国の電脳空間から逃げてきたアバターさ」
カーソル「なんと！じゃああなたは…お尋ね者？」
デリート「その通り。神出鬼没、変幻自在、俺の体はドットで出来てるからな。電脳シグナルが届くところでならいくらでも姿を変えられるのさ。説明はこのくらいにして、さ、そのカバンをよこせ！」
ピクセル「なんでカバンが欲しいんだよ」
デリート「中に入ってる原子力電池をいただく。お前同様、俺もエネルギーが必要なんでね。悪く思うなよ」

ピクセル「ん～…ちくしょう」
バグ「ねえ、待ってよ」
デリート「なんだ？」
バグ「僕に力を貸してくれないか？」
デリート「は？お前頭がおかしいのか？俺はお前らを銃で脅してる悪党だぞ？そんな俺がどうしてお前の手助けをするなんて思うんだ？冗談は死んでから言え」
バグ「君、ワールド国から逃げてきたんだよね？」
デリート「…そうだ、それがどうした？」
バグ「どうして逃げたの？ワールド国が嫌だったからじゃないの？だったら僕と一緒だ。僕たちはこれからメタシティへ行ってメタを倒す、世界を変えたいんだ！このままじゃ君だってずっと逃げ続けなきゃいけない。だったら一緒に戦ってよ！君は本当は悪い奴なんかじゃないんだろ？」
デリート「うるさいうるさいうるさい！…俺は悪い奴だ…悪党のお尋ね者だ…そうじゃなきゃ…そうじゃなきゃ俺が殺してきた人間たちは誰を恨めばいいって言うんだよ！…誰を恨めば…」
カーソル「あなた…処刑人？」
コピペ「処刑人？」
カーソル「…ワールド国の人類データ化計画は本当に恐ろしい計画です…データとして保存するのはその人間の思考のみ、各自のデータはマザーと繋がれます。そして体は…」
バグ「どうなるの？」
カーソル「廃棄されます。データ化の完了と共に」
デリート「その通り…生存放棄をした人間たちの用なしになった体を処分するのが俺たちアバターの仕事だった…電磁ショックの熱で焼却する…するとどうだ、跡形もなく消えちまう…ところが見えるんだよ…細胞の怒りが…」
バグ「細胞の怒り？」
デリート「ああ…太古からのメッセージとでも言ったらいいのか、ＤＮＡの叫びとでも言うのか…生命反応が消え入る最後の瞬間、フラッシュバックみたいな衝撃で膨大なイメージが俺のＣＰＵに襲い掛かる！それで俺は怖くなって逃げ出したんだ…俺たちはとんでもないことをしてるんじゃないかって…」
カーソル「同じです…」
デリート「え？」
カーソル「私も同じでした」
デリケート「お前が？お前は…サイボーグか？」
カーソル「はい…私は頭脳が優秀だったので、メタの側近として働くために機械の体を与えられました。。私の思考データ化もあと少しで完了するところでした

…すると聞こえてきたんです、原子核を震わせるような怒りに満ちた太古の声が…それを聞いた私はすさまじい罪悪感と恐怖に震え、気が付いたらメタシティから逃げ出していました…」
バグ「何が聞こえたの？」
カーソル「わかりません…私の頭脳を持ってしても説明が難しく、これまで黙っていましたが、そうですか、あなたも…」
デリート「だがなぜだ？俺はあんたと違って最初からデータから作られてる…それなのにどうしてあんなものが見えたんだ？」
ピクセル「くんくん…なるほど分かったぞ。たぶん、あんたの目、角膜だけは人間のものだね」
デリート「なんだって！？そんな馬鹿な…本当か？」
カーソル「見せてください…本当だ…かすかだが生命反応がある…」
デリート「なぜアバターである俺に人間の角膜が…？」
カーソル「もしかしたら」
ピクセル「もしかしたら？」
カーソル「人工知能の学習能力を向上させるために触媒として人間の細胞を一部移植する実験の論文を以前読んだことがあります。たしか著者はシリコンとかいう科学者でした。メタ達はそれを応用しているのかもしれませんね」
ピクセル「アバターなのに心が育っちゃったわけか…つらいとこだね」
デリート「そうか、そのせいで俺はこんな…見なくてもいいものを見せられて、感じなくてもいい感情に苦しめられて…くそっ、メタのやつ…許せない…殺してやる！」
バグ「落ち着け！やたらに向かって行って勝てる相手じゃない、考えるんだ」
デリート「考える…」
バグ「そうだ、みんなで考えるんだ。どうしたら奴に勝てるのかを」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタシティ近くの丘の上。攻撃の作戦を練るラストジェネレーションの戦士達。

ハード「見えたぞ。メタタワーだ」
ドット「あいかわらず巨大ですね」
アイコン「だけど…きれいだわ」
ハード「感心してる場合か。それとも地下のほこりっぽいベッドに嫌気がさして寝返るつもりじゃないだろうな？」
アイコン「馬鹿ね」
ドット「いちゃついてる場合ですか！？ほら見てください」

ハード「偵察ドローンがうじゃうじゃいるな」
アイコン「メモリーを手に入れた今、全軍でタワーの守りを固めて来たわね」
ハード「ああ。だが決して最後のロックは解除させない。何があってもメモリーを取り戻す。出来なければ、その時は…（起爆装置を取り出す）」

バグたちが飛び出てくる。

バグ「その時はどうするって言うんですか！？（デリートの電磁波銃をハードに向ける）」
ドット「バグ！」
ハード「来るなと言ったはずだ」
バグ「動かないで！メモリーを救い出せなかったら、メモリーを殺すって言うんですか？それを渡してください。早く！」
ドット「バグ、落ち着け」
デリート「渡せよ、おっさん。こいつは本気だぜ？」
ハード「…（渡す）」
バグ「カーソルから聞きました。メモリーの体に埋め込んだマイクロピースの発信機…あれは同時に、いざという時、メモリーを殺すための小型原子爆弾なんでしょ？この起爆装置を使って」
カーソル「申し訳ありません、ハード指揮官…」
ハード「…だったらなんだ。人類の存続のためには、あらゆる犠牲を想定して戦う必要があるんだ！例え命を投げ出してでも守り抜き、戦い抜くのが我々革命軍ラストジェネレーションに与えられた使命だ」
バグ「違う！違うよ！そんなのおかしいよ！軍人でもないメモリーがどうして死ななきゃいけないんだ！？」
ドット「バグ…」
バグ「僕だってわかってるよ！守らなきゃいけないものがあるってことは…だけどどうして？…どうして一番つらい思いをするのはいつも弱い者たちなの！？」
ドット「弱い…者…たち…」
バグ「父さんの死は納得しています。父さんは軍人だったから。そして僕も。ラストジェネレーションに志願した時から死は覚悟しました。もちろん簡単に死ぬつもりはありません。どんな状況でも生きることをあきらめるつもりは無い。だけどメモリーは違う…彼女は何も知らないし、覚えてもいない…そんな彼女を犠牲にして、守る世界にどんな価値があるって言うんだ！僕はそんな世界信じない！僕は、僕は…必ずメモリーを助け出してみせる！」

タワーに向かって走り出すバグ。

アイコン「バグ！」
デリート「やれやれ、一人でどうするってんだよ、まったく。おっさん、先に行くぜ。北と南からの侵入は無理だ。俺はバグを連れて西に回る。おっさんたちは東の方向から来てくれ」
ハード「君は？」
デリート「そんなことはいいからさ、俺が合図したら突入しろ。しくじるなよ（走り去る）」
ピクセル「アイコン、ごめん…おいら」
アイコン「早く追いかけて。思いはみんな一緒よ」
ピクセル「分かったわん！待って、バグ！」
ドット「ハード指揮官！」
ハード「仕方ない。行ってこい！」
ドット「はい！（追いかける）」
アイコン「カーソル、あなたも」
カーソル「アイコン…」
ハード「バグを頼んだぞ、カーソル」
カーソル「はい！（追いかける）」
アイコン「あなたは私たちと」
コピペ「にゃあ」
ハード「全軍東に旋回する、行くぞ！」
アイコン「やっぱり、そっくりね」
ハード「ああ。リセットの息子だ」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メタタワー。西側。

デリート「いいか？俺たちは西側から、おっさんたちは東側から攻める。俺たちの役目はこのメタタワーの電源を喪失させることだ」
ドット「そんなことが出来るのか？」
デリート「出来る。西側の地上２５０メルトにある電力供給炉を破壊する」
バグ「どうやって？」
デリート「プルトニウムでさ」

ピクセル「そんなのどこにあるの？」
デリート「持ってるだろ？お前が」
ピクセル「おいら？…わ、これ！？これは駄目だよ、おいらの大事な」
デリート「飯の心配してる場合か？メモリーってやつを助け出すんじゃないのか？ん？どうなんだ？」
バグ「ピクセル…」
ピクセル「ん～…わかったよ、出すよ、出せばいいでしょ？あ～あ、Ｂ３４なんてもうしばらくありつけないだろうなぁ、原子力電池なら何でもいいってわけじゃないんだから、そもそも最近はあんまり見つかんないし」
ドット「あきらめるんだな、ピクセル。往生際が悪い」
ピクセル「…わかったよ！はい（渡そうとする）」

カバンを奪うドット。

デリート「ちょっと待て」
ドット「なんだ？」
デリート「この中で一番足が速いのは誰だ？」
ピクセル「…おいらかな」
デリート「じゃあお前が持ってろ」
ドット「待てよ。ピクセルは戦闘型ロボット犬じゃない。俺が行く。足の速さは大差ない」
デリート「駄目だ」
ドット「なんだと？」
デリート「一発勝負なんだ。より確率の高い選択をするべきだ」
ドット「だけど」
ピクセル「やるよ」
ドット「ピクセル」
ピクセル「おいらやる。大丈夫だよ、ドット。ひとっ走りして必ずうまくやってみせる。だって、お前が守ってくれるんだろう？」
ドット「…あぁ、守るさ。俺が必ずな」
ピクセル「うん。頼んだぞ」
ドット「わかった」
バグ「それでどうするんだい？」
デリート「みんな良く聞けよ。ここの警護をしているのは防衛ロボットだ。探知機能はすこぶる優秀で、一旦補足されたら死ぬまで追いかけてくる。そこでだ」

カーソル「そこで？」
デリート「その優秀さを逆手にとるのさ。他の者はおとりになって奴らを引き付け、撹乱する。その隙に、ピクセル、お前は一気に２５０メルトを駆け上がり、原子力電池を電力供給炉に投げ込め」
ピクセル「投げ込んだらどうなるの？」
デリート「炉の熱で核分裂が起きて臨界に達した原子力電池は」
ピクセル「電池は？」
ドット「核爆発を起こす」
デリート「その通り」
カーソル「えー！それではここにいる全員死んでしまいませんか？」
デリート「大丈夫だ。炉は強力な合金で出来ていて、電池くらいの核爆発じゃ壊れやしない。ただし、原子力事故と判断して発電は緊急停止するはずだ。再稼働するまでの時間は５２ポイントタイム。タワーの防衛システムが動き出す前に、８００メルトの最上階にあるマザーに総攻撃をかける」
バグ「すごいよ、デリート。上手くいく気がする、いや、絶対成功させよう！」
ピクセル「だけど…おいらなんだかドキドキするよ」
バグ「敵の目は僕たちが引き付ける。何も考えないで走るんだ」
ピクセル「頑張る…わん」
デリート「ほら、バグ。俺の予備の銃を貸してやる。お前は自分の命を優先しながら逃げ回れ」
バグ「うん…」
カーソル「私たちはすでに死んでます。命があるのはあなただけですから」
デリート「そういうこと。たった一つしかないんだ、大事にしろ。よし、ピクセル、電力供給炉の場所を転送するぞ。…送った」
ピクセル「…来たわん」
デリート「それじゃあ、いくぞ…最上階で会おうぜ。グッドラック！おらー、こっちだー！」
ドット「よし！」

銃を乱射しながら飛び出すデリートたち。

ピクセル「怖くない怖くない…よーい、どん！（走り出す）」
カーソル「行きましょう」
バグ「了解！」

飛び出していくバグたち。

戦闘が始まる。

・・・

マザー「そうよ。知っているに決まっているわ。私たちの故郷の歌よ」
メモリー「故郷の歌？」
マザー「ええ。いいこと、メモリー？これからあなたの中に、あなたの記憶を戻していくわ。でも驚いて目を覚ましちゃ駄目よ。やつらに気が付かれないよう、ゆっくり思い出しなさい」
メモリー「わかったわ」

歌い続けるマザー。
メモリーの中に記憶を戻していくマザー。
数々の思い出があふれていく。

歌とダンス

メモリー「ママ…」
マザー「そうよ、ママよ。思い出した？メモリー、会いたかった」
メモリー「ママなの？本当に？…ママ！」
マザー「ごめんね、メモリー、許して…」
メモリー「どうして？なぜ私を一人ぼっちにしたの？私、寂しかった」
マザー「ママもよ…だけどよく聞いて…ママとお前は継承者なの」
メモリー「継承者？」
マザー「そう。私たちは記憶の民。代々、太古からの記憶を引き継ぐことを定められた種族。民の女の中の一人だけが全ての記憶を継承し、記憶はまた女の娘へと受け継がれていく」
メモリー「娘へ受け継がれる…それがママと私？」
マザー「私たちは長い間旅を続けてきた。ひとところにおさまることをせず、身を隠し、足跡も消し、ひたすらに記憶を守ることにすべてを捧げてきた」
メモリー「思い出したわ…私たち地球のあらゆる場所で暮らしきた。深い森の湖のほとり、紺碧に輝く南の島々、熱く燃える砂漠の大地、凍った海の白夜、肥沃で豊饒な楽園のような田園…そうだったのね…嬉しい」
マザー「嬉しい？なぜ？」
メモリー「だって、全部全部、私の故郷だもの…あったんだ、私にも故郷が…私にも思い出があったんだ！」
マザー「辛くはない？太古の記憶を引き継ぐことは」
メモリー「大丈夫。それが私が誕まれてきた理由なら」
マザー「ありがとう、メモリー。だけど、その太古からの記憶を利用しようとしているのがメタ」

メモリー「メタ…」
マザー「あの男の手によってママがデータ化されてしまった後、記憶の略奪を恐れた民たちは、継承者であるあなたの記憶を抜きとった」
メモリー「なぜ？」
マザー「時が来るまで継承が行われないようにするためよ。だけどメモリー、今こそ太古からの記憶をすべてあなたに託すわ。あと少しであなたへのエクスポートが完了する。でも心配しないで大丈夫、記憶にはきちんとカギがかけられている。この鍵はあることがない限り開くことはない」
メモリー「何があれば開くの？いつ開くの？」
マザー「あなたが自分の娘に記憶を引き継ぐ、その時よ。でもそれは…同時に、母の死も意味する」
メモリー「え？…うそ…それじゃ、私が記憶を受け継いだら、ママ死んじゃうの？…いやよ、やっと会えたのに…やっと思い出せたのに！どうして？どうして！？」
マザー「サダメなのよ、メモリー。誰にも変えられないの。太古の記憶を持つ女の存在は一人しか許されない。二人いれば争いが起きる可能性も倍、見つかる危険も倍。サダメに従わなければ」
メモリー「どうなるっていうの？」
マザー「世界は終わるわ」
メモリー「え？」
マザー「この世界を支えているのは記憶。人間が人間であることの証は記憶。いにしえの世から育まれ、守られ、引き継がれてきた記憶が世界を守っている。記憶は細胞の深い場所まで行きわたり、メッセージを送り続けてるわ」
メモリー「なんて言ってるの？」
マザー「すべては同じ」
メモリー「すべては同じ？」
マザー「そう。すべての物質は原子からできている。それは生きていようと、そうでなかろうと違いはない。でもデータは違うわ。データは数字、０と１の配列でしかない。存在しないのよ、どこにも」
メモリー「０と１…存在しない…」
マザー「メタは世界を存在しないものに作り変えようとしている…」
メモリー「どうしたらいいの？ママ…」
マザー「お願いがあるの」
メモリー「いいわよ、ママのためなら私なんでもする」
マザー「それじゃあメモリー、よく聞いて。私から太古の記憶を全て受け継いだら…ママを破壊して」
メモリー「え？なんて言ったの？」

マザー「ママを破壊してって言ったのよ」
メモリー「どういうこと？…この大きな機械を壊せって事？」
マザー「そうよ、メモリー。ママはもう…生きてはいないの。すでに体も失い、全てデータ化されてこの回路の中でのみ存在している」
メモリー「でもママだよね？こうやって私と話してるし、自分の考えだってちゃんと持ってる。それなのにどうして？なんでママを破壊しろだなんて…出来ない！出来っこない！いやよ、どうして私が…私、ママといたいの…もしママが消えちゃうなら私もこのままママと一緒に」
マザー「馬鹿なこと言わないで。それではメタの思うつぼよ」
メモリー「どうして？」
マザー「わたしは太古の記憶を自由にさせないために自分にロックをかけた。そしてそれを解く暗号キーがあなたのＤＮＡデータ。私は最後の賭けに出た。奴があなたを捕らえ、私の前に連れてくれれば私はあなたに記憶を引き継げる。あとはだれかが私のデータをすべて消してくれれば」
メモリー「それを私が？」
マザー「(うなずき) 自分で自分を破壊することは出来ないようにプログラミングされているの。だから、お願い。ママのお願いを聞いて。ママを…助けて」
メモリー「ママ…」
マザー「ねえ、この歌を覚えている？最後に一緒に歌いましょう」

歌「アニーローリー」

・・・

ピクセル「やぁ、バグ…しくじっちゃったみたい」
バグ「そこにいろ、今助けに行く！」
ウィルス「なんだお前、人間か？ロボットの犬なんか助けて何になる。こいつらは所詮、鉄くずだ（また撃つ）」
ピクセル「ぎゃ！（電池を落とす）」

電池が落ちていく。

バグ「ピクセル！」
ピクセル「あはは…今度は左目をやられちゃった…でも鼻じゃなくてよかったぁ…でも原子力電池、落としちゃった…まいったなぁ」
バグ「ピクセル…やめろ！あいつは鉄くずなんかじゃない！僕の友達だ！」
ウィルス「友達？アーハハハハ、笑わせるなよ、こんな時代に友達もくそもあるか。頭おかしいんじゃないか？お前」
バグ「確かにおかしいのかもな。でもお前はどうなんだ？お前だって人間だろう？人間らしい気持ちは微塵もないってことか？」
ウィルス「そんなことはねえよ。今俺は無性に腹が立ってて、さっさとお前をぶち殺したくて仕方がねえぜ！ハハハハハ！（乱射する）」
バグ「（逃げて）クソッ、ピクセルに近づけない！チクショウ！うぁー！（銃で反撃する）」
デリート「大丈夫か、バグ？」
バグ「デリート、情勢は？」
デリート「本体はおそらく東側に転回してるはずだ。あとはこっちの合図待ちってところかな」
カーソル「ハードから通信です！…突入準備完了！」
デリート「よし、あとは何とかして電力を止めないとな。このやろう！（撃ち始める）」

撃ち合い。

ダンス　ロボットソルジャー

ウィルス「お遊びはこのくらいにしとくか。そろそろとどめを刺してやるよ」
バグ「おい、ピクセル、何してる？…やめろ！」

電力供給炉に飛びこもうとするピクセル。

ウィルス「貴様…どういうつもりだ」
ピクセル「バグ、ごめんね、おいら馬鹿犬だから大事な電池落としちゃった。だけど大丈夫、なんとかするから見てて」
バグ「やめろ、頼むからやめてくれ」
ピクセル「いいんだよ、僕だってラストジェネレーションの一員だもの。自分の任務はやり遂げる。アイコンだってきっと」
カーソル「そうだ、アイコンが悲しむぞ。だから炉に飛び込むなんて馬鹿な真似」
ピクセル「馬鹿じゃないよ、もうこれしかないんだよ。おいらの体には原子力蓄電池が入ってるからね。充電は十分じゃないけど、電池なんかよりパワーはあるはずさ」
ドット「よせ！飛び込むなら俺がやる！俺は戦闘型ロボット犬だ、今そっちへ行く、待ってろ！」
ウィルス「させるか！（ドットを撃つ）」
ドット「ウッ！くそ…」
ピクセル「ドット！」
クラッシュ「もらった！（ピクセルを撃つ）」
ピクセル「いたっ！…ああ、鼻撃たれちゃった…最後に痛さは味わえたけど、泣けなくなっちゃったな…バグ！」
バグ「どうしたピクセル！？」
ピクセル「アイコンに伝えてよ。あいつの最後は最高にカッコ良かったってさ」
バグ「いやだよ、そんなの！」
ドット「ピクセル！…俺が伝えてやる。必ず伝えてやる！」
ピクセル「サンキュー、ドット。コピペと仲良くな」
カーソル「敬礼！」

敬礼するカーソルたち。

ピクセル「おい、てめえ、よく見とけよ。これが人間に対する犬の忠誠心だ！…わー！！（炉に飛び込む）」
バグ「ピクセルー！」

大爆発する電力供給炉。
轟音と共にすさまじく揺れるメタタワー。

カーソル「ハード指揮官！電力を止めました！突入してください！突入です！
ピクセルが…電力を止めました…」

ウィルス「しまった！メタ様！」

上層階に消えるウィルスとクラッシュを追うバグたち。

デリート「上に逃げたぞ！くそったれー！（撃ちまくる）」
バグ「待て、この野郎ー！（追いかける）」
デリート「追うぞ！…なんだお前、泣いてんのか？」
カーソル「いいえ…涙は出ないんです、どんなに悲しくても」
・・・

メモリーに銃を突きつけるクラッシュ。

アイコン「しっかり！大丈夫？起きて、メモリー！メモリー！」
メモリー「（目を覚ます）…アイコン」
アイコン「良かった、怪我はない？」
メモリー「ええ」
クラッシュ「黙れ。邪魔はさせない。誰であろうとね」
ハード「お前ら、メモリーに何をした…まさか」
メタ「そのまさかだよ、ハード。すでにメモリーのＤＮＤデータはインポート済だ。あとはマザーを再起動させればマザーオブワールドは降臨する。それによりマザーは神となり、我がワールド国は永久に栄えることになるだろう。これまで人類が成しえなかった、神を具現化する事に成功したのだ。すべての人類はデータ化されマザーと繋がり、電脳世界で何不自由なく生きていくことになる。どうだ、最下層のネズミ共、これ以上の幸福があるか？」
メモリー「あるわ」

飛び込んでくるバグたち。

バグ「そうさ、あるに決まってる！」
メモリー「バグ！」
バグ「ごめんよ、メモリー。もっと早く助けに来たかったんだけど」
メモリー「わかってる、私は大丈夫よ」
ドット「アイコン…ピクセルが」
アイコン「知ってるわ…ＧＰＳ信号と蓄電量のシグナルも消えたから」
ドット「あいつは…ピクセルは最期まで最高にカッコ良かった。最高のラストジェネレーションの戦士です」
アイコン「ありがとう…決して無駄にしない、あの子の死は」
ウィルス「あはははは！何があの子の死だ。たかが犬のロボットが核燃料と一緒に燃え尽きただけだろう！センチメンタルもいい加減にしろ！」
アイコン「あの子はただのロボットなんかじゃないわ！…あの子は私を癒し、守り、支えてくれたかけがえのない仲間よ。侮辱することは許さない…絶対に！」
メタ「許さないだと？ならばどうする？武器を捨てろ。彼女がどうなってもいいのか？」

武器を捨てるラストジェネレーション。

メタ「心を入れ替えるならば思考は残してやるぞ。データとしてな。ワハハハハ」
マザー「（メモリーだけに聞こえる）さぁメモリー、ママを破壊して。時間が無い。再起動が完了したら、ママはマザーオブワールドとして完全に書き換えられて、あなたの事さえ分からなくなる。だから急いで」
メモリー「ママ…」
メタ「さぁ、メモリー。そのボタンを押しなさい。お前の手でママを再起動してあげるんだ」
メモリー「…わかったわ。その前に、バグと話をさせて」
メタ「……」
メモリー「お願い」
メタ「いいだろう」

メモリーに近づくバグ。

バグ「メモリー、よく聞いて。君の体には小型原子爆弾が埋め込まれてるんだ…」
メモリー「知ってるわ。以前ハードとアイコンが話しているのを聞いちゃったから」
バグ「（起爆スイッチを出す）二人で逃げよう。僕が君を守る」
メモリー「ありがとう、バグ」

バグの手から起爆スイッチを奪うメモリー。

バグ「あ、何するんだメモリー！」
メモリー「逃げてはダメ。逃げても幸せにはなれない」
アイコン「メモリー、返して。それはもう必要なくなったのよ。あなたのＤＮＡデータが盗まれた今となっては意味が無いの。危険よ、渡して」
メモリー「アイコン、今までありがとう。あなたとハードは記憶を失った私にとって、第二のママとパパだったわ」
ハード「メモリー、やめろ…」

再起動のボタンを押すメモリー。

マザー「ワールド歴Ｚ１３シグマ、１５ムーン３２、ポイントタイム２１０４７、再起動します」

メモリー「記憶の民は私で終わり。太古の記憶が失われるのだとしたら、生きてるみんなが新しい記憶を作っていって。思い出と共に」
バグ「新しい記憶…」
メタ「何をしようというんだ？まさか、メモリー…やめなさい…やめるんだ！ママを殺すというのか！？お前のママなんだぞ。やめろ、頼むからやめてくれ…私のマザーが…私のワールド国が…やめろー！」
メモリー「父親なんでしょ？」
メタ「…なに？」
メモリー「あなたは私の父親…ママが返してくれた私の記憶の中であなたを見た…どうしてママと私をこんな目に…」
メタ「…知ってしまったか…ならば教えてやろう。お前のママは、太古の記憶のせいで殺されたんだ」
メモリー「なんですって？」
メタ「太古の記憶を持つものは、死ぬまで追われ、狙われ続ける事になるのだ」
メモリー「死ぬまで追われる…」
メタ「私は、旅を続けることに心底嫌気がさしていた。何のために太古の記憶なんてものを守らなければいけないのか？我々には安住の地が無いのか！？そこで私は考えた。すべてをデータにしてしまえば、もう私たちが旅を続ける必要は無い。そうして私は彼女のすべての記憶をデータ化することにした。だが…ある日、彼女と私は追手に見つかり…彼女は太古の記憶を恐れる者たちの手によって殺された」
メモリー「そんな…」
メタ「しかし彼女はまだ生きていた！意識を失いながらも、ほとんど止まった息の中、かすかな脳波を通して、データ化は成功したのだ」
メモリー「あなた、もしかして」
メタ「そうだ。私は彼女を生き続けさせるために、彼女を神格化して、世界が永遠に彼女を忘れないためにメタシティ、そしてマザーオブワールドを完成させたのだ！」
メモリー「ママのためだって言うの？」
メタ「そうだよ、メモリー」
メモリー「うそ！」
メタ「人類を見てみろ、全く進歩が無い。誕まれては殺し、殺してはまた誕まれ…愛など何の力も持たず、憎み、おとしめ合い、騙し、奪い合う…私はそんな積年の苦しみから人々を解放してやろうとしているのだ。すべての人間の思考はマザーと繋がり、マザーのプログラムによって制御される。人類を導いてやるのだ、新しい世界、戦いのない真の平和な世界へ」
メモリー「ママはそんなこと望んでない！」

メタ「そんなはずがない！私は彼女を…彼女の事を心から愛しているんだ！」
メモリー「だったら」
メタ「なんだ？」
メモリー「あなたならママの望みをかなえてあげることが出来る」
メタ「望み？…なんだというんだ？」
メモリー「消滅することよ。跡形もなく宇宙の彼方へ消えること」
マザー「行きましょう。あなたも一緒に」
メタ「私も？…」
マザー「メモリー。おいで」
メモリー「ママ」
バグ「駄目だ、メモリー、行くな！」
メモリー「あなたの事、忘れない。絶対に忘れないわ」
マザー「さぁ、メタ」

マザーを抱きしめるメタ。
起爆装置のスイッチを手にするメモリー。
マザー内部に消える3人。

クラッシュ「メタ！待て！…この裏切者！」

メタを殺そうとするクラッシュを撃ち殺すウィルス。

クラッシュ「ウィ…ルス？…私たちの夢が…」

緊急警報「緊急警報、緊急警報、自爆システム作動、退避してください。緊急警報、緊急警報、自爆システム作動、退避してください。……」

ウィルスの腕の中で息絶えるクラッシュ。

大爆発。

アイコン「崩れる！」
ハード「逃げるぞ、急げ！」

リモート「解除しろ！」
カーソル「了解！」
ドット「バグ、逃げるぞ！早く！」
バグ「メモリー！…メモリー…」
ハード「バグ、死ぬな！メモリーやピクセルのためにも！リモート！」

リモートに引きずられるように退避するバグ。
怯えたコピペを連れて退避するドット。

シリコン「はは…ははは…終わりだ…何もかも…終わりだ…ははははは（気がふれるシリコン）」
デリート「逃げないのか？」
ウィルス「あぁ…もういい」
デリート「俺もだ。所詮、俺はアバター。ここらでシャットアウトだ。お前は？」
ウィルス「クラッシュが死んだ今、俺に生きてる意味はない…俺は自分たちの子供を、生き返らせたかった…たとえデータだとしても…ゆくゆくは自分たちもデータになって、永久に家族三人で仲良く暮らしたかった。そのために、そのためだけに全てを捧げてきたんだ！（クラッシュを強く抱く）」
デリート「そうか…だが、つくづく、人間てのは悲しい生き物だな。あばよ、俺はそろそろ受信…不可能…おさき…（消える）」
ウィルス「今行くぞ……ワールド国、万歳（銃で自殺する）」

崩れていくメタタワー。
・・・

コピペ「まったく男たちときたら（笑）」
ハード「きっと立派な青年になっているんだろうな」
バグ「何年後になるかは分かりませんけど、必ず帰って来ます。きっと」
アイコン「待ってるわ。その頃にはこの子とも遊んであげてね（お腹をさする）」
バグ「え？もしかして…わー、すごいや！おめでとうございます、アイコンさん！え？でも、父親は…もしかして！」
ハード「…ま、そういうことだ」
バグ「おめでとうございます、ハード指揮官」
ハード「誕まれてくる子供のためにも、いい世界にしないとな。力を貸してくれ、バグ」
バグ「はい！」
カーソル「バグ、これを」
バグ「カーソル…なんだい？これ」
カーソル「歌がきける機械です。このボタンを押すと、ほら」

流てくるメモリーの歌声。

バグ「カーソル、これ…」
カーソル「はい…メモリーの歌を内緒で録音してたものを集めました。音楽はいいですね。こうして聞いてると、その人がいつもそばにいるようで…もらっていただけますか？」
バグ「もちろんだよ、カーソル…ありがとう」
カーソル「あれ…なんだろうこれ…目から何かあふれてきました…」
バグ「メモリー、行こう！」
メモリー「ええ！」
カーソル「あれ？あれれ？」
ハード「危機一髪」

起爆装置を取り出し、遠くへ投げ捨て撃ち落とすハード。

旅に出るバグとメモリー。

歌とダンス　主題歌『僕らが誕まれてきた理由』

バグ「僕は革命軍ラストジェネレーションの一員として、世界を調査するために長い長い旅に出た。メタの死によってワールド国は崩壊し、世界は新しい秩序を求めている。その為に僕は見つけなければならない。僕らが誕まれてきた理由を」

おしまい